

D.ハーヴェイ『コスモポリタニズム』とカント自然観の検討

李明哲（神戸大学）

「自由」などの普遍的原理は、人類全体を解放するコスモポリタニズム的概念として謳われる一方で、歴史的には植民地主義や帝国主義を正当化したり、新自由主義的経済による格差社会を引き起こしたりもしてきた。

地理学者でありながら経済学、哲学、社会学などを横断的に研究するD・ハーヴェーは、近著『コスモポリタニズム』（2013）において、コスモポリタニズムが陥る（上記のような）矛盾の理由として、地理学・人間学的理解が決定的に不足していることを指摘する。ハーヴェイは、近年活躍するベック、ヌスバウム、「修飾語つきのコスモポリタニズム」論者など、ローカルな状況と普遍的原理の緊張関係から生み出された多様なコスモポリタニズム理論を網羅的に厳しく吟味する。他方で、ローカリティを絶対視した一部のコミュニタリアニズムなどが陥る排他性にも警鐘を鳴らす。このような俯瞰のあと、ハーヴェイがオルタナティブの前提として主張するのが「批判的地理学理論」の必要性である。そこでは主に、地理的多様性を形成する「時空間性」、「場所」、「環境」という三つの基本概念の再定義が行われ、地理学・人間学・生態学的知識全体の動態的理解が目指される。

ハーヴェイは、上記の議論の出発点そして対照軸に、カントを置く。なぜなら、近年のコスモポリタニズム理論のきっかけはカントの世界市民概念ないし国家（共同体）連合の理論であり、さらにカント自身が、人間学・地理学はすべての知識の「可能性の条件」「予備学」と述べているからである。しかしハーヴェイによれば、カントは十分な地理学的・人間学的土台を構築出来ぬまま、失敗に終わった。実際、長年の人間学・地理学講義録には、ステレオタイプや偏見に基づく内容も多分に含まれており、雑多な知識の寄せ集めという評価が下されることも多い。ローカルな知識の特殊性と世界市民という普遍的原理に生じるこのような矛盾が、カント以降のコスモポリタニズムにも引き継がれて来たという。

本発表では、ハーヴェイが議論の出発点・参考軸にしたカントの問題点を整理・検討した上で、地理学・人間学に関わるカント自然観の思想的変遷を明確にする。

ハーヴェイが指摘するカントの主な問題点は、第一に、地理学と歴史学を分けたことである。分離された絶対的空間と時間というニュートンの定義によって、カントの地理学は空間秩序の知識に終始することになり、この解釈が、共通の血統に基づく国民国家という領土的アプローチを固定化することになる。第二に、人間学と地理学を分けた上で、後者を軽視したことである。自然によって備わった「性質」を人間の実践によって「性格」に変えていくという人間学の発想は、自然体系内部の人間（＝地理学）と能動的主体としての人間（＝人間学）の分離であり、ハーヴェイは「デカルト＝カント的二分法」と呼ぶ。

ところが、カントが地理学講義に着手する前年に執筆した『天界の一般自然史』（1755）などでは、人間と自然は二分されておらず、宇宙全体が有機的連関で構成されている。ここでの目的論的自然観が、地理学講義ではどのように現れていたのかを検討する。そして、人間学講義で登場する「機知」や統制的原理としての「世界市民」概念は、『判断力批判』（1790）での「反省的判断力」や「究極目的」と関連している。そこで展開される、自然目的論から（人類の進化を描く）道徳的目的論への接続など、カント自然観の変遷を明らかにする。これらの作業をとおして、ハーヴェイが提唱する批判的地理学理論の理解と妥当性検討の足がかりとする。